

ほどよい近所づきあいのまち

正会員 小林 清

多摩ニュータウンのこのまちに昭和57年から住んでいる

2階建てタウンハウス67戸、3階準接地6戸、4階中層24戸のこぢんまりした団地である今年2回目の大規模修繕を予定していて、ゼロから約60万円まで棟別に大きな差のある一時金の負担にもかかわらず、過日の臨時総会で66名の出席者の全員賛成により、実施が議決された

これには、20年以上一貫してホームドクターをつとめていただいている、コンサルタントの技術力や信頼感も大きいですが、なんとといっても、日頃の近所づきあいを通じて、建物タイプの違いなどによる利害を乗り越え、一体のシステムとして住みこなしてきた、住み手のコミュニティ意識が最大の支えになっている

このコミュニティ意識は、どのように醸成されてきたのだろうか

住戸規模が約110 - 120㎡超と大きいこともあって、入れ替わりは少なく、恐らく3割以上が当初からの住み手のままである

リタイヤした年金暮らしの所帯も増え、巣立った子供たちが孫を連れて、正月や夏休みに帰省するまちになっている

約10年に1回は、管理組合の役員とその前年度のブロックごとの世話人の役目が2年続けて輪番で回ってくるが、すでに3巡目に入りつつある

冒頭のように、組合の総会も、委任状によらない直接の出席率がいつも過半数を越える

決して『異議なし総会』などではなく、様々な意見が遠慮なく飛び交い、議案が修正されることもあり、健全で活発な自主管理の状況を表している

暮れの『餅つき』と納涼『夏のフィナーレ』は、世話役を楽しむ常連の皆さんが主体となって、にぎやかに行われ、地域の名物になっている

親睦ゴルフコンペも、今年で約70回を数え、登録メンバーは約30名、毎回4、5組が確実に出場する

それやこれやで、97所帯、お互いに顔見知りになる機会が多く、家庭の状況もある程度垣間見えるようになってくるが、それ以上にはお互いに踏み込まないように気をつける、というほど良い近所づきあいが、20数年のあいだにできあがっている

昨年の大晦日には、葬儀が集会所で行われ、きびしい寒さの中を多くの仲間が参列した



少子・高齢社会対応や防犯・防災のまちづくりのためには、『自助』『共助』『公助』の社会システム、なかでも『共助』が大きな力になることや、そのための日頃からの近所づきあいの大切さが、阪神大震災を教訓として再認識されているが、郊外の団地では『公と私』だけがあって『共』が薄いというのが、通念とされている

だが、我がまちでは、かなり違っていて、『共』を苦にせず積極的に享受する、というコミュニティ意識が、20数年間のあいだに成立している

このような、定住性を高め近所づきあいを濃くする仕掛けとして、住戸規模のゆとり、ヒューマンスケール、接地性に加えて、豊かなセミ・パブリックスペースと小規模な管理単位が大きな役割を果たしていることを、日々の生活で実感している

この団地に永住したいと思う

『共』というコミュニティ意識の醸成を確信して、タウンハウス主体によるまちづくりを試みた、先人の見識に感謝し高く評価したい



富士・丹沢夕景

